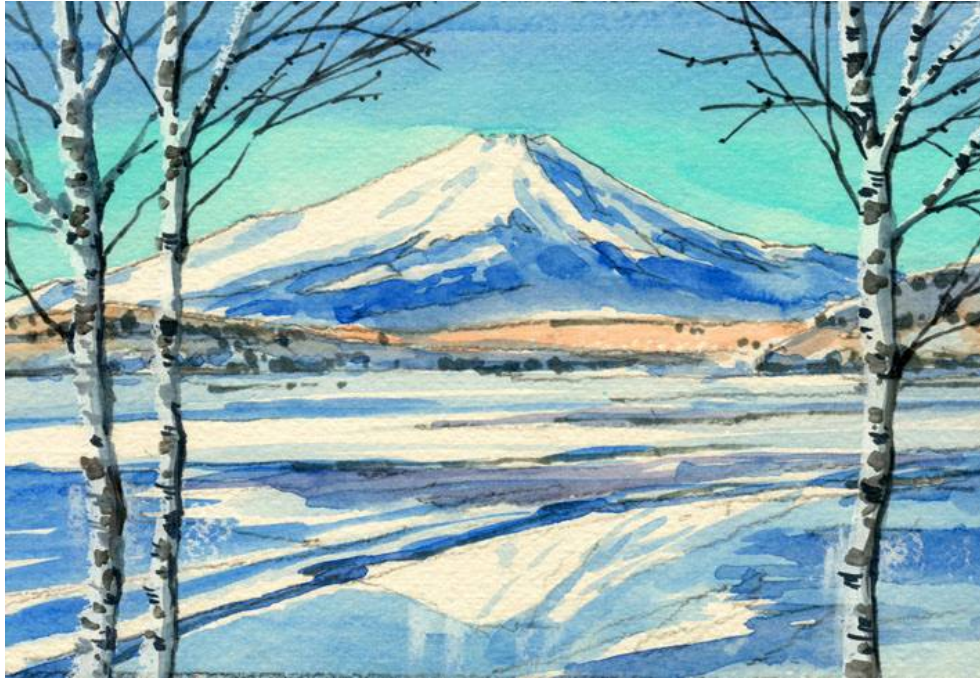
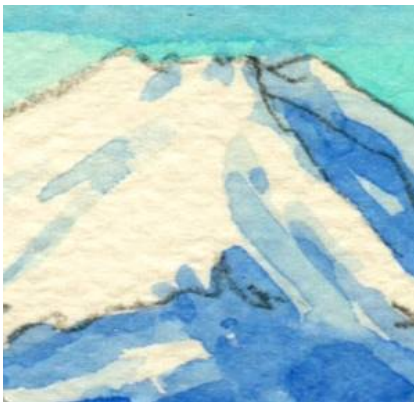


「日々の理科」(第3804号) 2025,-1,-5  
水彩画教室 「厳冬の山中湖と富士」  
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所  
田中 千尋 Chihiro Tanaka

上林 暁(かんばやしあかつき)は自身の小品の中で「紀行小説家は一度その場所のことを書いてしまうと もうその土地には興味がなくなる」といった意味のことを記しています 絵を描く者も同じような気がします 一度描いてしまった風景を もう一度描きたいとはなかなか思わないものなのです 私の場合 意外と風景の記憶力が良く 一度描いた風景は もう何も見なくてもある程度描けてしまうこともあるでしょう しかしどうしても2枚目を描きたいと思う風景もあります この山中湖もそうでした 水面の波でブレていた富士の反映が 一瞬風がおさまって 氷の隙間にくっきり見えたからです 白樺も2本から3本にして 構図も安定したような気がします



これが完成した絵です



1、主題の富士山 山頂火口壁の凹凸は重要なので よく観察して慎重に描きます



2、左(東)から光が当たっているため 右裾を暗くします 手前の草地(演習地)はジョン・ブリアン(肌色)で描きます



3、白樺は画の最後に白のパステルで描きその後影と樹皮の模様を描きます



4、冬枯れの白樺の梢は 薄墨の「弔専用のペン」で描きました



5、湖面の結氷の境界線は なかなか難しいです 何種類かの濃さの青で描いています



6、富士山の反映は ややシャープに やや薄めに描きます